

私たち人間のこの世での生涯の終わりは死であります。これは旧約聖書の中の創世記によれば、人間が最初に罪を犯したところから定められているものであり、これを避けることの出来る者は一人もいないわけです。このように申し上げますと死は人生の終わりであり、これで何もかも全てが終わってしまうと考えがちであります。聖書の中でそうは語っておりません。信仰の馳せ場を走り終わるのはしばらくの休みに入ることであり、そして新しい命への出発が死であると教えているのです。

私たちはそれぞれ親しい方、あるいは親類や兄弟、親などの死に出会ったことが誰しもあることでしょう。それは大変に悲しい出来事に他なりません。今まで親しかった、あるいは本当になくってはならなかった存在が自分のそばから去っていく。それも二度と戻っては来ない形で去っていくというのはとても大きな悲しみです。キリスト教では死は悲しくない、むしろ嬉しいことである…、と考えるのであろうと皆様も教会の外の方からいわれたことがあることでしょう。そしてそれに対し人々が抵抗を持っていること、私たち自身もやはり死は悲しいものであるというのをよく知っておりますので、何と答えてよいか分からないことも多いようです。

聖書の中では死の悲しみは否定されてはおりません。主イエスもまた、自分に近くいた人の死を悲しまれ、親族と共に悲しみを共にされたことがありました。ヨハネによる福音書には次のような記述があります。

『イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。イエスは涙を流された。ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った』。これはラザロの死を主イエスが悲しまれた箇所であります。主は、涙を流されてその死を悲しまれたのでした。主イエスは、人の死の悲しみをよく知っておられたのでした。教会はそしてキリスト教は、死を決して悲しくないなどとは考えてはいないのです。主ご自身もまた死の悲しみを共にされたおられたのでした。

そしてそこに留まっているだけではないというのが次に重要な点であります。ラザロはこの後主イエスによって永遠の命へと招かれていきます。死はた

だ終わりという意味だけではなく、新しい永遠の命への出発であります。この世の働きを終えて新しい命へのスタートの日であります。私たちにとって逝去日は大切な日です。その人の誕生の次に記念すべき大切な日です。それは死を記念すると共に、新しい命への道に出発した記念の日なのです。その意味ではまさに命日、命の日です。私たちは死の定めを嘆くことがあっても永遠の命の約束によって慰めを受けるとは、死がとても悲しいものであるが故に、人間では決して出来ない慰めを主なる神が与えてくださり、それを私たちが本当に受けとめ、信じていくところに救いの道が備えられているということなのです。

この教えて確信を与えてくださったのが主イエスの本日の教えです。主はやがて自分は捕えられて殺され、三日目によみがえると言われました。弟子たちはそれが何を意味しているのかわかってないようですが、主は確かに十字架上の受難を予告されたのです。しかし主の受難は死で終わりではなく、よみがえりすなわち復活もまた予告されておられました。これこそが永遠の命が確かにあるしるしであり、私たちもまた永遠の命を与えられるしるしであります。主は私たち人間に先駆けてよみがえられ、私たちにそれが真実であることを示してくださいました。そして主は、その真実を前に、あなたは永遠の命を信じるか、主イエスがよみがえったのを信じるか、そして自分にもやがてその喜ばしき永遠の命が与えられるのを信じるか、と言っておられます。私たちが毎週の礼拝の中において唱えるニケヤ信経で、永遠の命を信じます。と最後に唱えます。私たちの信仰生活の中において、自分自身の存在全てをもって受けとめ、本当に信じる心を与えられていきたいものと思います。これもまた大斎節の大切な取り組みの一つでありましょう。